



第 23 号
 月 1 回 発 行
 ひの心を継ぐ会
 〒799-1336
 住所:愛媛県西条市
 上市甲 720-1

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は国家の鎮護となります
- 一 私達は大和世界を建設します

神道(八)(大和世界の建設)

古事記

北と一ほ(4)

—原子の週期率と八価元素—

竹葉 秀雄

物理学者は物の創始を採ねて不断の旅をつづけている。そして、光子、陰電子、陽電子、中性子、中間子、中性微子などと、原子以前の素粒子を捉え得ているのであるが、未だ究極にいたり得ていない。

しかし、物を構成する組織の第一階段において九十二個(自然のもの、人工原子十一種)の原子を発見し、その原子の構造を明らかにしたのである。

(この原子(Atom)は、原子核(中核)と電子より成り、原子核は中性電子(ニュートロン)と、陽子(プロトン)と、中間子(メソトロン)との結合で成り、其の周囲を陰電子(エレクトロン)が、一瞬間三十万キロメートルの速力で右に廻転し、陽子は左に廻転している。そこに数霊の玄妙が窺われる。これをメンデレフの週期率と呼び八価元素と云っている。

第一番目の水素原子は一個の陽子に対し、一個の陰電子を付着している。二個の陰電子を付着しているヘリウムを二番とし、順次規則正しく一個ずつ陰電子の数を増している。そして、更に数霊の不思議さは、第一番目の水素原子と、第二番目のヘリウム原子は、陰電子の廻る軌道が一つしかないから第一外輪だけであるが、第三番目のリシウム原子は陰電子の走る軌道が二つあるから第二外輪があり、第一

外輪には二個の陰電子を付着し、第二外輪には一個の陰電子を付着し、第四原子、第五原子と進むに従い、第二外輪に陰電子の数が一個ずつ増加しその数が八個になると、第三外輪に及ぶのである。八個の陰電子を増す毎に外輪を第四第五と増してゆくのである。この様な配列は何故なのか。其の性質を調べて見ると、九十二個の原子が八つ毎に其の性質が週期的に循環していることが明かにされたのである。即ち、第三番目のリシウム原子と、第十一番目のソヂウム原子は同性質であり、第四番目のベリリウム原子と、第十二番のマグネシウム原子とは同性質である。

更に一個の原子は、八個以上の原子と化合能力がないのである。これを「八価元素」と云うが、私はその玄妙不可思議なる「数霊」に額ずくのである。(この事は、大八洲の国生み、八柱の神を単位としての神生みと相関する)

原子の種類に依り、原子核の周囲を廻転している陰電子の数が異なるように、核内の陽子と中性電子の数も一定せず、例えば、第二番目のヘリウム原子では、其の周囲を二個の陰電子が廻転しているが、その原子核は二個の陽子と二個の中性電子から成り立ち、第八番目の酸素は陰電子八個に対して核内の中性電子八陽子八となり、ウラニウム原子には、中核に九十二個の陽子と、百四十二個の中性電子があり、其の周囲を九十二個の陰電子が廻転しているのである。ここで陽子と陰電子の数が同じことが窺われる。

陰電子の原子核を廻転する速度は、一秒間に三十万キロメートルであることは前述したが、其の引合力、排斥力はニグラムの電子は百二十クオドリントン噸(一クオドリントンは百万を四乗した数)の力を持っており、この力を開発したのが原子爆弾

で、その原料に使用されているのがウランニウム原子である。九十二個の陽子と陰電子、百四十二個の中性電子から成立しているこの原子の総力は驚くべき天文学的数量となるのである。また、水素爆弾は、水素に三種類あることが発見され、第一は、一個の陽子と一個の陰電子とから成るもの、第二は、一個の陽子一個の中性電子に対して一個の陰電子から成るもの、第三は、一個の陽子二個の中性電子に対して一個の陰電子から成るものであるが、第二第三の核に中性電子を有するものは重水素と呼ばれ、これが水爆に利用されるのである。

この様に宇宙構造の原子の数理が明かにされたことよって、今は、銀を金にし、鉛を銀にすることも可能になった。やがて、堆積されたガラスや自動車などの廃品、ビニールやプラスチックなどの不用品も、鉛や銀や金に再錬金されるに至るであろう。宇宙は数理によって構造されて居り、更に創造され、造化されていく。数は天地の「一」である。

前号の補説

易八卦の数理の所に、「先天図」のみ掲げて、「後天図」をおとしていたから此所に出しておく。「先天図」は説卦伝第三章に「天地位を定め、三沢気を通じ、雷風相薄り、水火相射わず、八卦相錯わる。往を数うる者は順にして、来を知る者は逆なり。是の故に易は逆数なり。」の文によるもの、邵康節は、之を伏羲八卦の位なりと曰う。先天の学というもの。「後天図」は説卦伝第五章に「帝は震に出て、巽に斉い、離に相見、坤に致役し、兌に説言し、乾に戦い、坎に勞し、艮に成言す。万物震に出づ、震は東方なり。巽に斉う。巽は東南なり。斉うとは万物の潔斎を言うなり。離とは明かなり。万物皆相見る。南方の卦なり。聖人南面して天下を聴き、明に嚮いて治む。蓋し諸を此に取るなり。坤とは地なり。万物皆養を致す。故に坤に致役すと曰う。兌は正秋なり。万物の説ぶ所なり。故に兌に説言すと曰う。乾に戦う。乾は西北の卦なり。陰陽相薄るを言うなり。坎は水なり。正北方の卦なり。勞卦なり。万物の帰する所なり。故に坎に勞すと曰う。艮は東北の卦なり。万物の終を成す所にして、而して始を成す所なり。故に艮に威嚴すと曰う。」とあり。此の章は八卦の方位を明言する。邵康節の文王八卦、後天の学というものである。之に後冊十二支を配する。

第三章 農民生活の倫理的考察

菅原 兵治

〈第一節 文質原理より見たる農民の諸態度〉

第一章に於て「農」の哲学的意義を究め、第二章に於て「農」の歴史的使命を明かにし、以て農の重要性を知り得た私共は、更に近く思いを致して脚跟下を照顧するの眼を以て、現下農民の實際的態度を倫理的見地より観察研究したいと思ふ。これ亦貴い修己の一要事である。

従来分類

従来農民の分類に用いられた名称は、耕作反別の大小によって區別せし大農、中農、小農等の外形的分類は別として、其の生活内容より或は「精農」といい、或は「惰農」といい、或は「篤農」といい、更に近来は一部の人人々によって「悟農」などという名称を以て区分されつつあるようであるが、実はこれらの間に判然たる區別の存するものもなく、又、一定の原理によってなされた分類とも見られず、殆ど常識的分類の名称に過ぎないようである。私はこの農民の態度の分類に就いても亦前述の文質の原理より論述批判して見たいと思ふ。

彊義的態度

文質関係よりいえば、理想的農民の態度は勿論「文質彬彬たる君子」であらねばならぬ。然らば農道生活に於て、何を文となし、何を質となすべきか。思うに農道生活の表現に於ては、実行的態度が質であり、説示的態度が文である。故に文質彬彬たる農道の君子は、強き実行力——勤勞力を有すると共に、又、其の実行の深き意義を理會証悟する教養も有せねばならぬ。(然しそれは決して輕薄に喋々するの謂ではない。)換言すれば一面強き実行力の所有者たると共に、一面深き義理の自覺者たらねばならぬ。此の態度を私は先哲の用語に従つて彊義的態度と云ふ。

(注)彊義的態度の「彊義」の語は書經阜陶謨の九徳中の「彊而義」の意である。「彊」は「つよし」と訓み、実行力の強きを意味し、「義」は其の彊の実行力が正

しき義にかなうことをいうのである。

兎角強いは其の「力」に委せて瀆武に走り易く、義理を説く者は屁理屈をこねて実行の活力に乏しい。然し私共の望む処のものは、希くは彊にして義、義にして彊なる態度である。苟くも三種の神器を戴く日本国民として、剣を揮って決死邁往する力あると与に、又鏡を以て其の理を照破し、玉を以て和かに之を抱擁する知と仁とを有たまほしきものである。

かくいえば、彊而義など、そんな事は理想論だ、況んや百姓農民に向つてそんな事を要求した処で、それは言うべくして求め難いことである。農民は只文句なしに働けばそれでよいではないか——というかも知れぬ。然し私は之に対して徐ろに答えよう。農民は或はそれでよいかも知れぬ。然し私共が瑞穂国永安の礎石として、而して日本国家作新の原動力として要望する日本農士は、仮令至難であるにせよ、此事を冀わねばならぬ。而して又、事実就いて此事を見よ、少くも農道的偉人として徳を後世に及ぼした人々は、何れも唯単に彊き実行力、労働力に優れていたのみに止らず、その言に於て文に於て、義理の説示に亦非凡なる力量を示している。二宮尊徳を見よ、大原幽学を見よ、石川理紀之助を見よ、船津伝次平を見よ、実にもの見事に、彊にして義、義にして彊なる文質彬々たる態度を堂々と示しているではないか。実際は仲々至難だからといって、吾々の欣求の目標たる理想を低下せしめ俗化せしむることは決して人生を向上せしむる所以ではない。吾々人生の理想は飽くまでも高く完き高峯に置くべきである。況んや浮文の末に趨る現下の時勢を匡救して正道に帰せしむべき大いなる使命を「農」に於て担当せんと覚悟し熱願する者に於ておや。（この彊義的態度が更に洗練せられて老成して来ると、所謂「老農的態度」と称すべきものになって来る。これに就いては後に改めて項を設けて述べることにする。）

君子を失った日本

三浦 夏南

君子とは如何なる人物であるかと問えば、一つには道義を實踐する有徳者と答える事が出来るであろう。しかし、論語を読んでいると単なる道義の實踐者の側面だけではなく、人の上に立ち、大衆を先導する指導者、或は言い方を変えれば、人々の生活を下から支える保護者の性質が見えて来ると思う。近代化以後の日本が失ったものは多いが、この君子の存在もその一つであると言える。

江戸時代までの日本には武士や貴族といった人の上に立ち、人を指導すべき責任を生まねがらに持った人々が存在した。勿論そこには賛否両論があり、江戸三百年の泰平の中で自らの責務を忘却し、祖先の恩恵に甘えた人々も恐らく少なくはなかつたであろう。しかし、それを封建的だと言って適切な取捨選択もなく反動的に見捨ててしまうのは如何であろうか。幕末の先哲も多くは武士階級の人々であつたことを考えると簡単に見過ごすことは出来ないのではないか。

明治の近代化とともにかつての身分は漸次撤廃され、皆一律に臣民となり、一億総武士として我が国に責任を持つことを国民は義務付けられたが、その結果は如何なるものであつたか。確かに新生日本に勢いのあつた時代には人材が続々と出現し、国家の要所にて所を得て活躍したであろうが、一旦落ち着いて見れば、人はとかく平安を求めるもので、権利だけを求める国民が大多数となり、今の如き衆愚時代を現出している。

一億総武士という発想自体は理想として美しいかもしれないが、そこには近代的な匂いがあり、人間の自然を忘却しているようにも思える。平安を求めるのは人の欲求の本質であり、それは咎めるべきことではなく、多数のものが挙つてそちらに向かうことも至極当然である。しかし泰平の世は自然に立ち現れたものではなく、使命を奉戴した英雄によって生み、育て、守られてきたものである。平安の享受者ではなく、平安の創造者、保護者となる為にはやはり自らが特別であるとの強い自覚が不可欠であろう。それは一個人の人生で一朝一夕に培われるものではなく、幾代もの世代を超えて継承発展され行くものである。かつての貴族、武士はそういった強い自覚を持った人々であつたし、吉田松陰、西郷南洲等幕末の英傑

と呼ばれる人々はその意識を江戸時代の最後まで持ちつづけた一族の末裔であった。

平安を求める人間の性質が悪いのではなく、斯くの如き大衆に方向を与える君子の存在の欠如が問題なのである。次の時代に必要なのは大衆の覚醒などという西洋的妄想ではなく、真の意味での貴族、武士の再生なのである。これは言うまでもなく、法的な権威によって保障された特権階級の意味ではない。その真逆、権力からかけ離れた郷土にあって、毅然として自立する在野草莽の一族集団である。我々は幾代もの長い月日をかけてここに至りたいと常日頃考えている。

とよくも農園だより

三浦 美恵

今月はアスパラガスの手入れ、ネギの定植準備・定植、人参の収穫・出荷、里芋の準備、春野菜の準備をしました。

帽子とマフラーをまき、水たまりに映る笑顔の親子に手を振りながら、畑に向かいます。元気がない株が多いと心配していたアスパラガスから少しずつ新たな芽が出てきました。それに伴って生えてきた雑草を息子と一緒に引いていきます。少し前までは一緒に作業をすることなど出来なかった息子が一人前に作業をしている姿を見て、子どもの成長の早さに驚かされます。五月からを予定している収穫に向けて、再度中耕・畝上げを行い、アスパラガスの生長を促しました。



次に、一昨年前に自分たちで建設したハウスへ、ネギの定植も行いました。当時は葉物野菜を近くの産直市への出荷するために、家から二十分程かかる杏奈さんの実家に建設しましたが、その後農業の方針を転換したため、しばらく使っていませんでした。ハウスなら、通常より早くからネギが収穫できるため、今回はそちらに定植しました。ハウス内は暖かいため野菜が早く育つ半面、水の管理や湿度の微調整が難しく、病虫害の被害を受けやすいです。そのため、こまめにハウスに向いて水やり、換気、育ち具合の確認をしています。水やりの設備を整えるために何度もホースの調整をしています。

続いて、人参の収穫・出荷です。産直市への出荷用に育てていた人参が大きくなり、毎週末、山の畑から収穫し、持ち帰って土を洗い落とし、袋詰めして産直市へ



持つて行きます。山の畑で育てていたため、鹿の餌となっているようで、畑に行く度に人参が減っていきます。鹿に負けないよう、私達も毎週収穫して行きます。

また、里芋の準備も行いました。畑に鶏糞や苦土石灰をまき、トラクターで深耕していきます。この後は肥料をまいてマルチを張っていく作業があるのですが、五反という広い面積の里芋をするのは初めてなので、タイミングを逃さないよう、天気予報と畑の乾き具合を見ながら主人と相談します。

最後は春野菜の準備です。今年も昨年より多くの野菜を早くから育てようと、初めてのトンネル栽培や育苗に挑戦しています。白菜・キャベツ・ケール・ブロッコリー・レタス・大根・蕪・人参・ジャガイモ・トウモロコシ・枝豆の播種・定植をしました。「大きくなーれ」と言いながら息子と水やりし、芽が出たか小まめに確認に行きます。秋に定植していた玉ねぎやニンニクも順調に育っています。春を目前に控え、少しずつ暖かい日が続く様になってきました。また草刈りに追われる日が迫っていると思うと恐ろしいですが、同時に沢山の野菜が育つ、生命が漲る時期でもあります。来月も家族で協力して農業を営んで行こうと思います。



★活動報告

- ・二月十二日(水) 十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)
- ・二月二十六日(日) 十九時～二十一時 勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

★今後の予定

- ・三月十一日(水) 十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)
- ・三月二十五日(水) 十九時～二十一時 勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

年会費

- ・一般会員 三千元
- ・賛助会員 一万元
- ・特別賛助会員 三万円
- ・支援会員 一万円

